

そして、又、数日が過ぎた……。

しばらく、雨が降った……。熊野の雨は激しい……。あつという間に道が川のようになる。いつもは、穏やかな顔をみせている岩田川が、ごおごおと凶暴な音をあげている……。これでは、歩く事は出来ない……。

清重の館の物置き小屋に、何人もの乞食や、障害者達が、雨を避け……。雨宿りをしていた。

恵まれた者は、滝尻王子の宿坊で雨を避けていたが……。金銭のない彼等は、こうして民家の小屋を借りて雨宿りをするしかない。

清姫は、ハツに命じて十葉に生姜を混ぜた薬湯を作らせ、雨宿りをする者達にふるまった……。



一人の男が、その乞食や障害の者からも、さらに、ぼつんと離れて、雨が降りかかりそうな軒先の片隅にしゃがんでいる……。

清姫は、それに気が付くと……。その男にも薬湯をふるまおうとする。

乞食の女が、清姫の袖をつかんでとめた……。

「やめな……。あの男は癩だ……。」

清姫は、その袖を離して……。静かに言った……。

「癩の者なら……。何度も会った事があります……。それほど、怖れるものではない……。」